昭和五十三年十一月二十六日　郷土史資料

第九十一回

史跡めぐり資料

（結城市・城跡と結城つむぎ）

越谷市郷土史研究会

理事　山崎善司

第九十一回　史跡めぐり案内

一、日　時　十一月二十六日曜日

集　合　越谷駅前　午前八時三十分　集合
午前九時〇一分発　太田行　乗車

一、行　先　結城市　結城城跡　乗替〜久喜・小山・結城駅下車

称名寺　結城朝光の墓・越ヶ谷氏の墓石
孝顕寺　御朱印塚跡
弘経寺　与謝野蕪村
結城つむぎ　実順資料館
結城城跡　市内　本町
玉日姫の廟　市内　玉岡
慈眼院　結城家累代の廟

一、帰　路　結城駅乗車〜越谷駅下車

一、会　費　壱千六百円也　但し、昼食持参の事。

以上

われもまた　心につくる　罪科を
名にあらわして　植るひともと

親鸞

行く春や　紫けむる　筑波山

蕪村

古庭に　うぐいす啼きぬ　日もすがら

蕪村

結城市

結城市、　茨城県結城郡、古くは、下総国結城郡結城郷と云ひ、大変古い歴史を持つ町である。「結城トハ、結束スルノ義ヨリ取レル名ナルベシ」又、大同三年成レル古語拾遺に「大富命、更ニ沃壤ナル地ヲ求メ、阿波斎部ヲ分チテ之ヲ率イテ東上ニ往キ、麻穀播殖ス、麻ノ好ク生フル所、之レ総国ト謂ト、穀木ノ生フル所、之結城郡ト謂フ」。とある如く、大富命の頃より史実に上り、市内の絹村林には、三十三塚・松木合には、十三塚と呼ばれる大小さまざまな古墳郡がある。又古書地名考には、「結城郷、今結城町是ナルベシ、土人云フ、結城町ヲ元ハ一ト手郷、又ハ西宮郷トモ云フ、山川庄ノ内ナリトソ、古語拾遺ニ「穀木生フル所、之結城ト謂フ」ト有ルハ、即チ此ノ事ナルベシ。是ノ郡名ノ起レル所以ナリ。本郷ハ下総ナリシカ、一時下野ニ入リ、元禄九禄、元ノ下総ニ属セリトソ。結城郡結城郷、之レ部家アリシ地ナルベシ」。と有る如く昔古より、強大なる勢力のあつた豪族が蟠拠して居り、此の地方の中心地であつた事が想像できる。又天慶ノ乱の平将門の遺跡（山川）や、近隣には日本戒壇の一つである、薬師寺や国分寺などがあり、其処に僧鑑真・弓削の道鏡などの墓がある。当時此の地方は、仏教文化の栄華を誇つた古くから栄えた町である。鎌倉時代には、藤原秀郷の流れをくむ小山氏より出た、七郎朝光が此の地に興し結城氏を称し関東八屋形の一つに数えられ、結城百万石と呼ばれる繁栄を築きあげた。以来鎌倉・室町・戦国の世を十八代続き、徳川の世に至り越前北の庄に移封となり、結城氏の代は終り、後、水野家が藩主となり明治に至る。

昭和二十九年三月市制施行、人口四万二千人、面積六五・二一平方キロメートル・水戸より、水戸線にて一時間二十分、結城駅の他に東結城小田林駅がある。

結城市は、茨城県の西端、栃木県境に接し、結城台地の北端を占める、商業と田園都市である。市域は鬼怒川と、其の支流の田川にまたがる地である、「結城」の名が歴史に現れるのわ鎌倉時代からである。此の地方に古くから副業として織られていた、絹織物を、結城家によって、朝廷や幕府におくられ、以来結城紬の名が全国に広く知られる様になった。江戸時代には藩の積極的な保護と技術の改良によって製品は江戸に送られ、現在でも京浜や京阪神に出荷されている。

結城紬は、副業に行なわれている事と、手作業で紬がれる糸を使い、いざり織と云う特殊な技法で織られるために、生産性は低いが、渋味のきいた高級絹織物としての市場性は高く、年間三万反程度が生産され、売上高は八億円（昭和四十五年度）を越えている。

戦時中食糧増産の為、畑作への転換がなされたが、まだ養蚕は盛んで、桑苗の生産高は全国一位を誇っている。従って養蚕による繭の生産も年々盛んになりつつある。又千瓢や桐下駄・桐タンス等の桐材加工の二次加工も逐次隆盛を見せ始め、製糸工場・皮革工場等もある。

名産品　結城紬・絹糸・皮革・桐タンス・桐下駄・玉瓢・竹工品・干めん・金網・日本酒

結城紬　平織　国指定無形文化財

縮緬　県指定無形文化財

いづれも真綿から糸を紬ぎ絣括り型染め、そして古くから伝えられて来た機引のいざりばたを用いる機織まで、総て手造りで生産される。

種類　飛絣織・十字絣織・井桁絣織・清楚な図柄織の細工絣織

結城紬

結城紬（ゆうきつむぎ）は結城市の特産品にして、高級絹織物として、広く知られている。結城の地名は、「穀木」（ゆうのき）の良く育所「古語拾遺」に由来し、古代から此の地は織物の産地として知られて出た。此処で織られた紬は、鎌倉時代以前には、常陸紬・常陸綾織と呼ばれ諸国名産として数えられ、室町時代に結城家より、朝廷や将軍家に献上品として紬織が使用されたので、結城家の名を取つて結城紬の名が起きたと云われている。

始め、天蕃命が麻　之業を教導き、天日鷲命と倶に広めたとあり、又、多畳命（おほねのみこと）が三野の国から常陸国久慈郡に移り、真迦て織り出したのが、長幅部紬（ながはたべのあしぎぬ）と云い、此の遺法を今日に伝えた織物が即ち、結城紬で、吾が国最古の歴史を有するものと云われている。古くは、古書に見える常陸紬（あしぎぬ）常陸綾織・常陸紬織等これて素神天皇の御代すでに、常陸の特産物として織り出されていた。

戦乱や水害など幾度かの盛衰あつたが、江戸時代の始め、慶長七年、代官伊奈備前守忠次が此の地を支配する様になつてから、信州や京都から、殷織や染色の技術を導入し従来の無地紬に加えて、縞文様（しまもよう）が織られる様になり、更に江戸末期には絣文様（かすりもよう）が織られ、明治以降に、飛絣織・十字絣織・井桁絣織が織られ、現在では、花や鳥など複雑精緻な図柄を織り出す細工絣織が生産されている。

結城紬には、平織（国無形文化財）と縮織（ちぢみ織）（県無形文化財）の二種がある、いずれも真綿から糸を紡ぎ・絣しばり・藍染めそして、古くから伝えられて来た、腰引のいざりばたを用いる織織まで、総て手造りて生産される。高度の技術を要求される細工絣織を一反仕上げるには、数ヶ月もかかる為、極めて高価な物も少くない。然し、糸質も強く、染色も堅ろ

うで、其の民芸的な感覚と色合の渋さの為、人気を集めている。昭和二十八年県無形文化財の指定を受け、更に、昭和三十一年三月、国の重要無形文化財として総合指定を受けた。

現在、結城紬の生産は、結城市と其の周辺村の農家の副業として行なはれ、年産約三万五千反生産に従事する農家数は約二千戸、紬の里結城を訪れる観光客の数も多い。

称名寺　市内浦町

結城朝光、念仏として信仰心深く、親鸞を招請して法聞し深く之に帰依した。建保四年（一二一六）新居精舎を改築し念仏聞法の道場として宿縁を結ぶ。嘉禄元年（一二二五）新居精舎を下総国結城本郷西ノ宮に移し後年、結城家代々の菩提寺として寺墓を定め、聖人の直弟子真仏上人を招請して初代開基とされ、聖人より賜はれた法名を「称名寺」以て寺号とされた。

開基真仏は、親鸞門弟二十四輩の第二に列し高田真仏と云う。称名寺は、元関東七ヶ寺の第二に置かれている名刹にて、真仏に帰依した、結城朝光、朝広等四代の墓が境内にある。此の朝光の墓とされている多宝塔は、実は供養塔で墓碑は慈眼院結城家の廟に集められている。

寺宝として親鸞聖人の親筆を交える「往生要集」（県文化財）が残っている。

浄土真宗本願寺派、新居山高田院称名寺

※称名寺住職の話によると、墓石の多宝塔の下唐戸を修理した時に、二重の石箱の中に歴代様逸の骨が納められて居る事を確認致て居りますので、市で発表している「供養塔」であると云う説は、間違いであると言っている。

孝顕寺　市内立町

結城家十五代政朝と深い関係を持つ寺である此の寺には、政朝の武者肖像画や（県文化財）同夫人・晴朝の肖像画などが収蔵されている。

政朝の子政勝が、弘治二年（一五五六）に制定した「結城家法度」は良く知られているが、

其の際の「御宗印塚跡」（県文化財）の碑が境内にある。城下町の発展の為に地租を免除した地域を示す碑である。　曹洞宗　天女山泰澤院

弘　経　寺　　市内西町

結城秀康が、文禄四年（一五九五）長女松姫の為に菩提所として建立した寺である。徳川家康家光の保護を受けて栄えたが、江戸中期の俳人与謝野蕪村ゆかりの寺として知られている。

蕪村は、絵画的・ロマン的俳風をもつて知られ、文人画家としても知られているが、彼の、俳友の砂岡雁宕（いさおかがんとお）をしたつて結城を訪れ、弘経寺に寄寓していた事があり其の時　寺の客殿に、淡彩の梅花・楼閣・山水の図などの襖絵（県文化財）を残している。結城の風物を其の著「新花摘」に記している。尚同寺には、絹本当麻曼荼羅（県文化財）が所蔵されている。

玉　日　姫　の　廟

市内玉岡にある。花崗岩で囲まれた玉垣の中の五輪塔が玉日姫の墓である。玉日姫は、関白九条兼実の七女として生れ、親鸞上人の妻女として、上人が越後に流されたので、侍女と共に結城に下り、上人の帰りを待つた。其の後配流を解かれた上人は、笠間の稲田に草庵を結んでおよそ二十年間を、其処に過した。其の間関東御教化の上人御内室として、内助され御苦労された事跡と伝説が伝えられている。又上人京都御帰洛の折り御得度され「恵心尼」と法名を賜わり剃髪されて、姫は玉岡に草庵を作り布教に勤め、建長六年（一二五四）六十四才で生涯を閉じるまで、此の地に止まつた。

御墓地は、結城城跡の北西の近郊玉岡にあり古来墳墓の地の小字を玉日地と称され、本願寺宗主の准如、参詣され、玉日宮の額字を下され玉日参道の標石は、六百年の歴史を伝え、御墓地に、是地黙雷師の筆による。

慈眼院　結城家の墓

慈眼院は、結城城跡の南東の端にある大谷川の地にあり、境内に結城家累代の墓塔である。慈眼院は、現在は寺域もさだかでない程、荒廃しているが、墓塔は、四方を土手に囲まれ、東側に入口がある。正面に結城家の祖、朝光を祀る五輪塔があり左右に順次累代の五輪塔が二十基程が立列んでいる。五輪塔の型態は、一定ではなく、其れぞれの時代の技法を良く現わしているので歴史的にも貴重なものである。秀康、越前に移封するに当り、各寺々にある墓石を一ヶ所に集めて整理して先祖を祭る墓塔としたと云われる。他に説あり、郡代伊奈備前守忠次が一ヶ所に集めて整理したとも伝えられている

福寿山と云い、別に八尺堂と云う有り今も其の荒れた姿を見る事が出来る。

曹洞宗　泉雲寺の項。　泉雲寺は総寧寺の末寺で、下総国国府台に有り。

結城城　市内本町

水戸線東結城駅より北北西六百メートルの処小高い丘の一帯である。現在城跡らしき地形の残されているのは、本丸と其の西の、二の丸、及び南の、かなり大きな郭との三　分であるが総て　浄水場・人家・小学校があり、わづかに本丸のみが、草木茂る城跡公園となつて、其の面影をとどめ、一隅に崇敬神社を残している。

城の重要なる郭は、周囲を低地に囲まれた、比高十メートル程の高台にあり西南は小川が西の台地とを区切り南に流れ、北は、広い水田地帯があり、本丸から約四百メートルに田川が、豊かな水をたたえ北西より北・北東・南へと取りまく様に流れている地形である、　尚外郭の防禦線としては、西は、吉田用水の内側で、結城市街地を含む高台一帯で神社・祐名寺・常光寺・孝顕寺・弘経寺・好覚寺・安穏寺・神明神社、北は田川で囲まれた低地、東は、同じく田川で囲まれ、一部に神社・松月院・貴船神社・

乗国寺、南は、白山神社・観音堂・聖厳寺稲荷神社・大勝寺と城を取囲む高台地に拠点を占めている、此れらで囲む広大な地域を含むものが城の全貌である。永享十二年結城の合戦に拾余万の大軍を一年もの間、向うに回して戦った頃がしのばれる。

城は、朝光が鎌倉初期に築いてより、結城の合戦に焼滅ち、氏朝自刃、其の時三才の四子成朝が、城に復帰して之を再興した。古河公方の重臣として仕え、上杉や北条と戦ったが、政勝の代には、下妻・長沼・下館一帯に威を振い、主家に従いて、北条氏に属し五千石を賜うと、上杉謙信と戦い勇をはせる。晴朝の代、天正五年には、北条氏政と戦い、天正十八年春には、八王子城攻には先陣を勤めて、盛臣秀吉から、本領十万一千石を安堵され、同年八月徳川家康の次男で、秀吉の養子となっていた秀康を、結城晴朝の世嗣として迎え、之に家督を譲った。関ヶ原の役の後、秀康、越前北ノ庄に移封する及び、四百年の結城の支配わ終った。城は、其の後、郡代伊奈備前守忠次の支配となり、後元禄十五年（一七〇〇）水野勝長が一万八千石を以て入部し、幕府に願出て修築、子孫相続いて明治に至るも、城は維新の時、藩主水野日向守勝知、徳川に忠節なる為、官軍に抗した為、兵火に焼かれて烏有に帰した事は誠に残念である

戊申の役の後、勝知は隠居となり、勝知の義叔父勝寛（筑之助）が之を嗣ぎ、廃藩となる。

朝光　頼朝落胤説

結城系図に、頼朝―朝光　結城七郎上野介、母八田宗綱女称寒河尼也、又朝光、頼朝猶子也又中山本結城系図　朝光、母八田宗円娘、仁安二年誕生、頼朝二十才母二十二才、嫡子、然し時政の女、頼家、実朝生み将軍を継、治承四年十四才時結城に至、鎌倉にて元服、朝光と号す御剣、野州寒河本郷を賜、後左衛門督、上野介に任、是結城家の祖也。建長五年癸丑二月二十四日卒、御歳八十八也。

結城家家系図

（氏姓家系大辞典）

藤原姓　秀郷流　九世孫

小山四郎政光

結城七郎朝光87　建長6.2.24

大蔵権少輔　中務大輔　康元2.3.1

中務少輔　正和元6.13

朝光68

広綱92

時広20

左衛門佐　貞広16

左衛門尉　朝祐32　延元元1討死

直朝16　満国4.4.3戦死

中務大輔　直光67　応永3.1.17

弾正少弼　基光82　永享2.5.11

中務大輔　光広48　応永23

小山泰子　泰朝

中務大輔　氏朝40　嘉吉元自害

園田家翁　長朝

朝宗20　嘉吉元自害

持朝24　嘉吉元自害

成朝24　寛正3.12.28

中務大輔

中務大輔　氏広31　文明13.3.29

中務大輔　政朝69　天文14.7.13

小山新六郎　高朝67

中務大輔　政勝56　永禄2.8.1

秀雅

晴朝

中務大輔　明朝　永禄2.9.7

中務大輔　晴朝81

徳川家康二子　結城大和守　秀康　五郎八

慶長18.7.20　結城十万千石領

慶長五年前移封

栄光山伝説　越谷市大松

浄土宗栄光山　清浄院縁起書によると、

永享の乱と結城合戦は、其の後関東が長い動乱の時代へ突入する前触れであつたと言える。

越谷市域が当時どの様な状態であつたかを示す史料はないが、わずかに市内大松の清浄院の縁起書「六ヶ村栄光山由緒書覚帳」の中に両合戦に関わる伝説が述べられている。

結城合戦で、結城方として、奮戦討死した、下総国野木の領主野木大炊介秀俊の妻は、一子松寿丸を抱き、乳母を伴つて野木の屋形を逃れ「下河辺、新方春日部」を経て、兄の下総国葛飾郡の大川戸左衛門太郎のもとに身を寄せた。

将軍義教の結城残党狩りは厳しく、大軍が大川戸に　襲来する風説にも左衛門太郎は恐れず、一族の私市・清久・高柳の人々も本家救援に駆付ける事になつた、之を聞いた秀俊の妻は、大川戸一族に難が及ぶのを恐れ、嘉吉元年正月二十一日の夜半、松寿丸と共に兄の館を抜け出し湖に身を投じて自殺し、乳母も後を追つた。三人の霊は、三頭一匹の毒蛇となつて湖辺を漂つたから、湖を訪れる人もなくなつた。

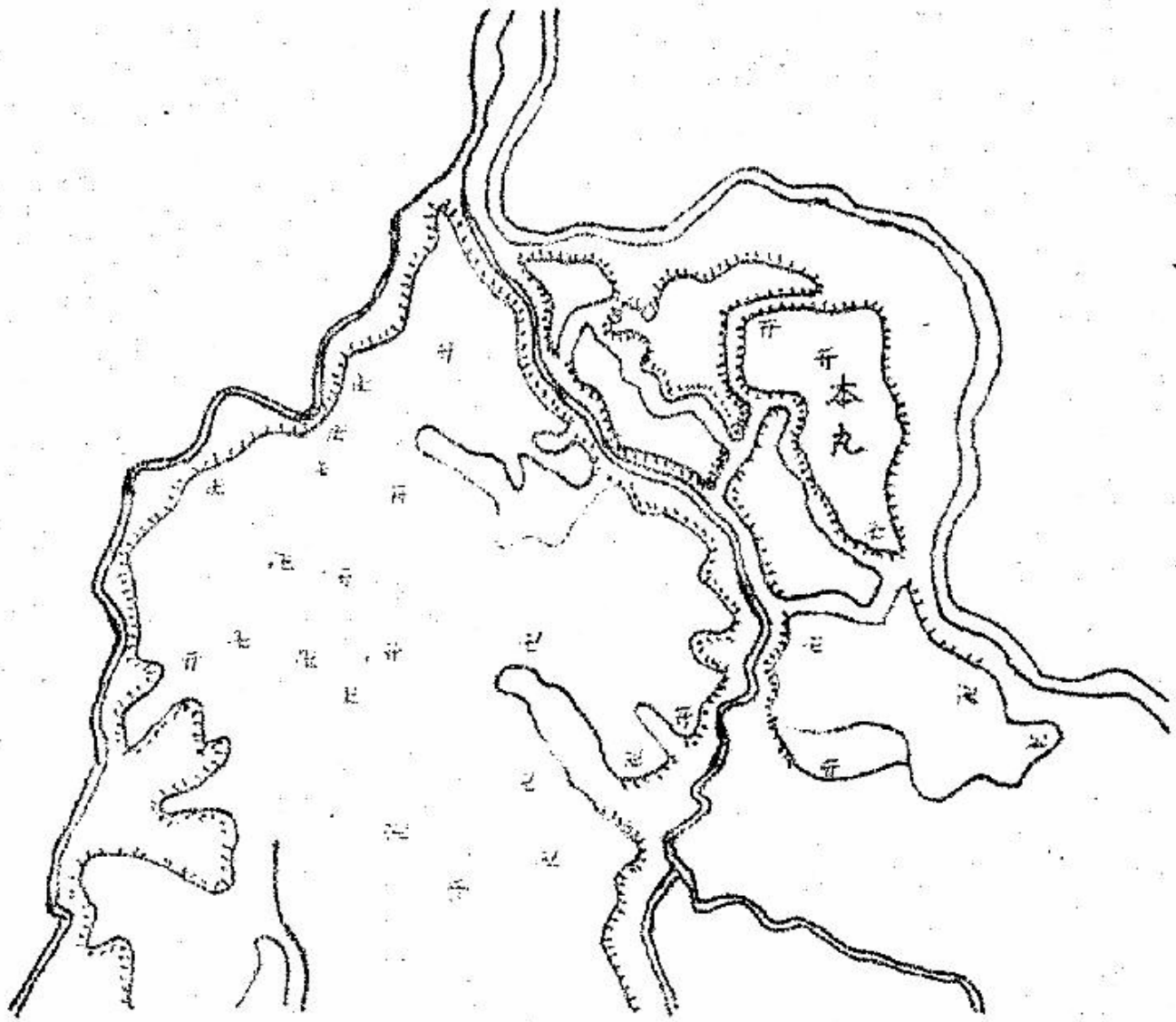
文安四年（一四四七）三月、栄光山清浄寺の住職賢真上人は、山門の東にある湖上の桜を楽しんでいた、其の時優艶なる一人の女が現れ、自分は此の湖中に住む大蛇で　愛する夫や子を死に追いやつた義教（将軍）を恨み、冥中に訴えたる処、幸い赤松殺（赤松満祐）の怨念に便乗して義教を殺す事が出来た。然し、「王者尊貴」を殺した罪は逃れ難く、身は毒蛇となつて地獄から逃れる事が出来ない。願わくは我が徒の為に念仏修業を為して救つて欲しい。と切々と上人に訴えた。哀れに思つた上人が七ヶ日大念仏修業を行うと、満願の夜、一山鳴動して湖は転じて岡となつた。人々は上人の徳に感じて其の地を蛇塚、開山塚と呼んだと言う。

以上が「暮聞書」の中の部分である。同書は天正十八年平信吉の撰と記してある。

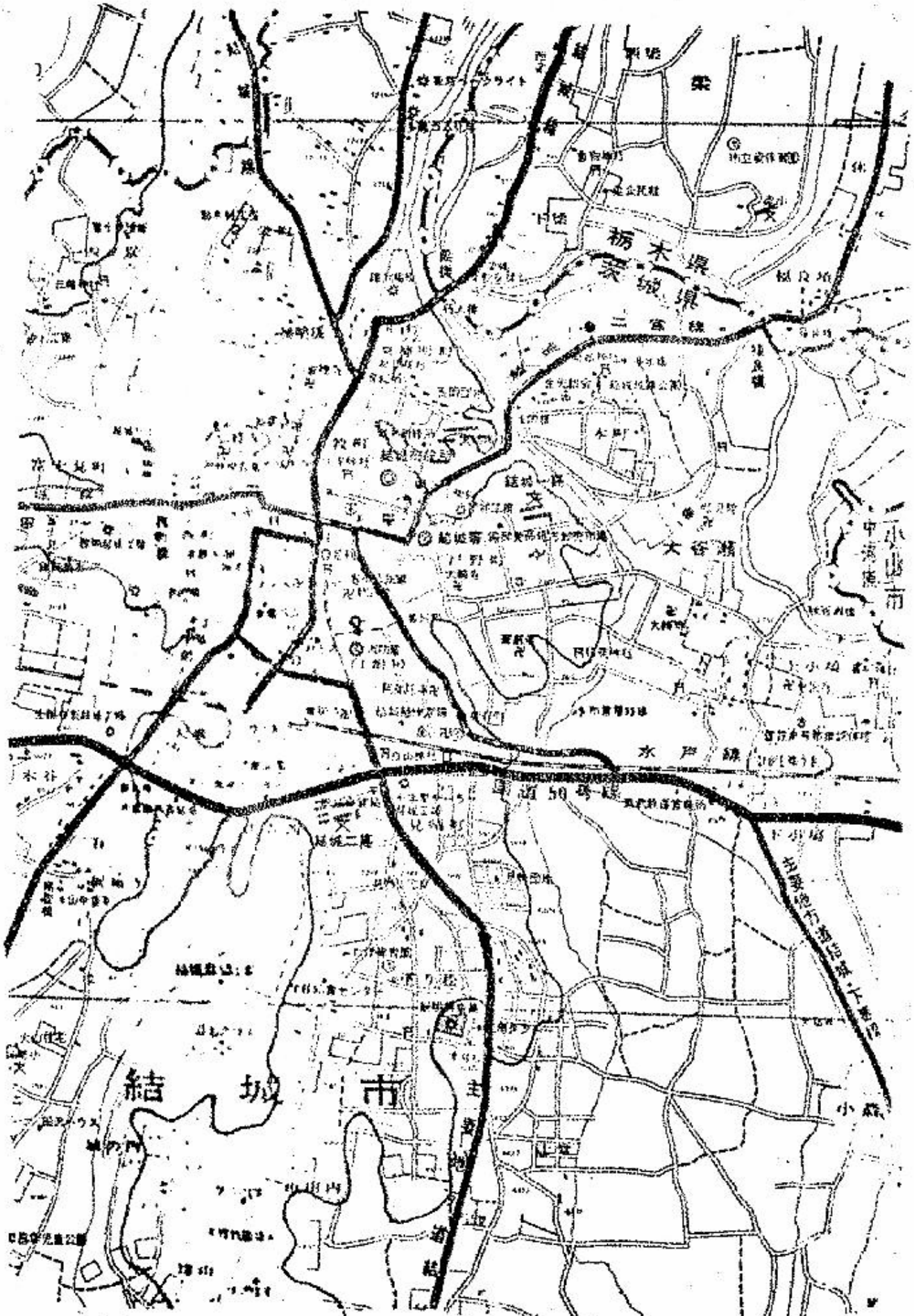
親鸞聖人

親鸞聖人は、法然上人の門弟にて、新仏教浄土真宗を開き、在家往生を唱えて、越後に流罪となつたが、建保2年（一二一四）許されて、越後より上野の佐貫を通り常陸国下妻に至る。（恵心尼文書）　そして其処で常総の武士農民などに布教を行つた、最初の地が、今の下妻市下妻「小島草庵跡」と云はれ、後笠間市稲田に移つた、稲田の地は、領主稲田九郎頼重の招きに応じて稲田に黒木の草庵を結んだ。場所は、さだかではないが、今の西念寺辺と思はれる。以来二十年間、関東・東北に渡て布教に努力した。特に元仁二年（一二二四）親鸞の思想を最も良く表した「教行信証」を此の地にて完成されたのである。

親鸞聖人は、貞永元年（一二三二）京都に御帰洛となり、正嘉五日迄は御得度されて恵心尼となり、之地に上まり、布教に勉めたという。西念寺裏山には、其の墓と伝えられる石塔と廟ある。後親鸞は九十歳の高齢にて京都に没した。



結城城
神社寺院図


栃木県
茨城県
三宮線
大宮線
水戸線
国道50号線
結城市
小山市